

日本自らの戦略で米国の空白を埋める

新たな世界秩序と日米関係

第1回 「グローバルバリスムの終わり」と新たな世界



拓殖大学海外事情研究所長
川上高司

今や世界的脅威の「北朝鮮による核・ミサイル開発」。安倍晋三総理はG7サミット閉幕後の会見で「北東アジアにとどまらない脅威に対し制裁強化を」と、国際社会全体で圧力を強める必要性を強調。一方、下馬評を覆し誕生したトランプ米大統領が掲げる「保護主義」は、G20などの国際会議で「グローバルバリスムの終焉」すら予感させた。今回、川上高司拓殖大学海外事情研究所長が、新大統領の登場で激変する軍事・外交・経済など世界秩序と日本の対応について4回連載で語る。

米国が目指す保護主義、英国のEU離脱 G7・G20で垣間見た権謀術数の外交

現在、世界はグローバルバリスムの旗頭の米国が、保護主義に向かい、英国がEUを脱退し後を追う。トランプ大統領はパリ協定からの離脱、環太平洋経済連携協定(TPP)からの離脱、北大西洋条約機構(NATO)の軽視、そしてG7やG20での米国第一主義を強硬に突き進む。一方、その流れを止めようと、EUは昨秋にカナダと自由貿易協定(FTA)を結び、日本はEUと経済連携協定(EPA)をG20開幕直前に大枠合意、グローバル化を促進する。

従来G7では米国を中心とする主要国(旧西側)が一堂に会してロシアや中国などのリビジョン21国家

川上 高司(かわかみ たかし)
拓殖大学教授。昭和30年、熊本県生まれ。大阪大学博士(国際公共政策)。米外交政策分析研究所(IFPA)研究員、(財)世界平和研究所研究員、防衛研究所主任研究員、北陸大学法学部教授などを歴任し平成17年から現職。専門は安全保障論。趣味は気功やレコード鑑賞。著書は『トランプ後の世界秩序』『無極化時代の日米同盟』『米軍の前方展開と日米同盟』『アメリカ世界を読む』『国際秩序の解体と統合』など多数。

米露中のコンサート・オブ・パワー到来なら NATOや日米同盟は変容・消滅する可能性も

この状況は中世ヨーロッパの状況に似通ってきている。18世紀から19世紀の中世ヨーロッパでは大国間の勢力均衡(バランス・オブ・パワー)により平和と安定がもたらされた。ここでは大国同士が紛争は回避しながら(コンサート・オブ・パワー)お互いの利益を享受した。現在の米露中ではイデオロギーで争うのではなく、経済や軍事上の利益を分かち合うことで価値観が享受可能である。

この状況は中世ヨーロッパの状況に似通ってきている。18世紀から19世紀の中世ヨーロッパでは大国間の勢力均衡(バランス・オブ・パワー)により平和と安定がもたらされた。ここでは大国同士が紛争は回避しながら(コンサート・オブ・パワー)お互いの利益を享受した。現在の米露中ではイデオロギーで争うのではなく、経済や軍事上の利益を分かち合うことで価値観が享受可能である。

この状況は中世ヨーロッパの状況に似通ってきている。18世紀から19世紀の中世ヨーロッパでは大国間の勢力均衡(バランス・オブ・パワー)により平和と安定がもたらされた。ここでは大国同士が紛争は回避しながら(コンサート・オブ・パワー)お互いの利益を享受した。現在の米露中ではイデオロギーで争うのではなく、経済や軍事上の利益を分かち合うことで価値観が享受可能である。